

第 37 回福島県輸血懇話会抄録

日時：2024 年 10 月 5 日（土）午後 2 時から
会場：原町生涯学習センター「サンライフ南相馬」

<一般演題>

1. 当院における手術に関連した血液製剤の適正使用への取り組み

¹⁾ 公立相馬総合病院 看護部

²⁾ 公立相馬総合病院 外科

³⁾ 公立相馬総合病院 検査科

○伊関 理恵¹⁾，山谷 英之²⁾，渡邊 清彦³⁾
吉田 志歩³⁾，齋藤 美香¹⁾，佐々木達也¹⁾

【はじめに】

当院での輸血施行例は年間約 600 件あり，手術に関連するオーダーが最も多い。年間約 1,000 件の手術をおこなっており，2004 年に濃厚赤血球廃棄率が 51.5% になった。廃棄の理由として，開腹による消化管の手術や，血管系の手術が関連していた。そこで血液製剤を適正に運用するために，手術関連の血液製剤廃棄 0 を目指し，他職種でこれまで取り組んできた結果を報告する。

【取り組み】

- 輸血療法委員会（2006 年 6 月より設置）発足
 - 輸血療法の適応，血液製剤の保管管理・使用状況・適正使用の徹底及び輸血療法に伴う事故や副作用，合併症対策について検討し，適正な輸血療法を推進することを目的としており，定期的な研修会を実施している。
- 血液製剤管理を薬事科から検査科へ変更
- 電子カルテ導入に伴い術前検査オーダーのセット展開
- 術前検査チェックリストの作成

【結果】

2004 年～2023 年までの廃棄率変化（一部を提示）

使用年	RCC 使用本数	廃棄本数	廃棄率 (%)
2004 年	646	333	51.5
2006 年	613	164	26.7
2010 年	818	53	6.7
2017 年	504	10	2.0
2023 年	662	5	0.8

【考察】

手術関連の血液製剤廃棄 0 を目指し，血液製剤の管理を薬事科から検査科へ変更することで，医師からのオーダーをダイレクトに受けることができ，交差適合試験，不規則抗体検査がスムーズとなり，効率的に運用できるようになった。術前に検査データを医師，看護師，検査技師が共有することで，血液製剤のオーダーが適正な量かチェックすることができるようになった。また，開腹手術から出血量の少ない腹腔鏡下の術式が主流になったことも廃棄率低下の要因の一つである。また，血液製剤の取り扱いと安全に輸血療法が実施できるように，研修会を定期的の実施し職員を教育してきたことも要因の一つにあげられる。

【今後の取り組み】

引き続き，多職種連携を図りながら安全で適正な輸血療法を推進していきたい。

2. 小規模病院 輸血関連業務の現状と課題

～若手技師 技師歴 3 年の挑戦～

医療法人伸裕会 渡辺病院 臨床検査課

○須藤 佳菜，阿部 洋子，高田有里子

当院は，病床数 140 床の小規模病院である。臨床検査課は検査技師 10 人体制で検体業務（主担当 3 名）・生理機能検査（7 名）に従事している。輸血業務で取り扱う血液製剤は，整形外科領域の術中，術後出血リスクを考慮した血液製剤が最も多い。次いで貧血改善を目的とした内科的治療用の血液製剤が多く，それらは必要の都度，発注・入庫・割り当てを行い，交差適合試験，不規則抗体スクリーニング検査等の一連の業務を担当検査技師 1 名が血液検査，凝固検査と兼務で行っている。

新人検査技師は，これらの検査を夜間待機，休日日直中に一人で行えるよう，入職後研修期間を経て，一定の練度に達することで夜間待機，休日日直に従事することが出来る。

研修期間が終わると，新人検査技師は配属された分野の自己研鑽を始める。その為担当領域ではない輸血関連業務等の手技は，担当分野検査の合間に不十分な内容の錬成をしなければならない。

入職 1 年目（2023 年 1 月 1 日～2023 年 12 月 31 日）の輸血関連検査業務（交差適合試験）の自身が検査に携わった回数は，1 ヶ月平均約 1～2 件（年間 17 回）であった。その他には輸血関連の勉強会への参加・研究班の班長挑戦など，様々な経験を積み

重ねている。

このような現状を踏まえると、交差適合試験、不規則抗体スクリーニング検査において、交差不適合や不規則抗体陽性に遭遇した際の検査手技・事務的な対応が適切に行えるのかという課題が見えてきた。

【連絡先】0244-63-2100(代)

3. 「看護師を対象とした輸血療法に関する実態調査—臨床輸血看護師の育成を考える—」

¹⁾南相馬市立総合病院 看護部

²⁾南相馬市立総合病院 臨床検査科

○加藤 美和¹⁾, 江井 雅美¹⁾, 小野田克子¹⁾

門馬 汐里²⁾, 富田 祥平²⁾, 渡邊由美子²⁾

I. はじめに

先行研究の輸血実施手順に関する看護師向け個別理解度調査¹⁾では、輸血実施および副反応観察の手順に関する知識の誤差について、経験年数による有意差は見られなかった。

東日本大震災以降、看護師の平均経験年数は減少しているが、輸血療法件数は増加している。また、現在まで臨床輸血看護師の在籍実績はない状況である。

そこで、看護師を対象とした実態調査により、輸血療法に関する不安や課題を把握し、輸血療法のさらなる質向上を目的に、臨床輸血看護師の育成について検討したので報告する。

II. 方法

- 1) 対象：看護職員 157 名
- 2) 自記式質問紙 調査期間：2024 年 6 月 1 日～6 月 7 日
- 3) 単純集計およびクロス集計
- 4) 院内の輸血に関するデータ

III. 倫理的配慮

対象者への研究の趣旨、協力への自由意志と匿名性の保証と不利益を被らないこと、院外で発表することを書面で記載し、質問紙に返答することをもって同意を得る旨とした。

また、院内倫理委員会にて承認を得た。

IV. 結果

- 1) 回収率：85% 有効回答率：68.1%
- 2) 平均経験年数：14.27 年
- 3) 輸血実施経験あり：90.7% 半年以内：65%
- 4) 輸血実施回数：RBC 10 回以上 78.3%
PC 10 回以上 54.8%

5) 輸血実施時の不安あり：96%

6) 特に不安な項目 1 つ：

副反応出現時の対応 64%

患者の観察 15.2%

7) 不安軽減のために実施していること：

スタッフ間での確認 46.7%

nursing スキル等知識の習得 24%

医師への相談 17%

研修会参加 11%

8) 令和 5 年度院内輸血研修会の参加：

受講した 63.6%

9) 研修内容を活用できているか：

出来ている 47.1%

出来ているが不足 42.6%

10) 臨床輸血看護師資格の認知度：

知っている 21%

知らない 79%

11) 臨床輸血看護師資格取得の希望：

希望する 28.2%

希望しない 71.8%

知っている→希望する：4 名

知らない→希望する：28 名

12) 輸血に関するデータ（納品製剤報告書）

	RBC	PC
2020 年度	1,042 単位	760 単位
2021 年度	1,102 単位	670 単位
2022 年度	1,558 単位	2,685 単位
2023 年度	1,708 単位	2,340 単位

V. 考察

調査の結果、輸血療法の実施経験ありと 90.7% が回答しており、65% は半年以内に実施していると答えている。また、実施回数については、RBC、PC と 10 回以上の実施が半数を超えていた。院内の輸血実績も、この 2 年間で倍増しており、日々の看護実践において、重要な看護業務となっていることが明確となった。

輸血実施時の不安についても、96% が「ある」と回答している。不安があることを前提とし、特に不安な項目としては、「副反応出現時の対応」「患者の観察」が 80% であり、輸血療法に関する知識の理解が必要である項目を選択していた。このことは、臨床輸血看護師が看護実践現場に在籍していれば、スタッフの不安軽減につなげることができるの